

目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーシズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制



安全

クルマが広く普及したことで私たちの暮らしは大きく変わり、多くの人々がモビリティによる自由や利便性、そして運転する楽しさを享受しています。世界的な都市化や高齢化の進行など、社会は大きな転換期を迎えています。クルマはそうした変化に伴う課題を解決するための一助となります。

日産は“走る楽しさと豊かさ”を体現するクルマづくりに取り組む一方で、リアルワールド(現実の世の中)における高い安全性を最優先に考えています。

交通事故の原因の9割以上が人為的ミスといわれる中、日産が目指しているのは、日産車がかかわる死亡・重傷者数をゼロにすることです。この目標の実現に向けて、クルマそのものの安全性向上はもちろん、ドライバーや歩行者、さらにはクルマを取り巻く多くの人々に安全意識を高めてもらうための啓発活動に幅広く取り組んでいます。

日産車がかかわる交通事故における死亡・重傷者数の1995年比低減率

〈2013年／日本〉

61% 減少

目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーシズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制

安全

CSRスコアカード

2014年度目標に対する達成度 ✓✓:達成 ✓:ほぼ達成 ×:未達成

年間を通じたCSR推進の管理ツールとして「CSRスコアカード」を作成して、「サステナビリティ戦略」ごとの活動の進捗状況を確認し、レビューを行っています。ここでは「CSRスコアカード」のうち、日産が現在実行している事業活動の価値観や管理指標についてご紹介します。

取り組みの柱	目標	進捗確認指標	2013年度実績	2014年度実績	評価	次年度以降の取り組み	長期ビジョン
技術の革新、安全運転の啓発活動による安全なクルマ社会の実現	日産車がかかわる交通事故死者数などの定量的低減目標を設定し、リアルワールドでの事故分析をもとに安全なクルマづくりと安全啓発活動を行う	日産車がかかわる交通事故における死亡・重傷者数の1995年比低減率 *公共データをもとに算出するため、実績の把握は当該年度の約2年後	日本: 61%減少 米国: 54%減少 欧州(英国): 63%減少 *2013年12月末時点	(データが公表され次第、集計予定)	-	安全技術の開発を推進する	究極の目標として、日産車がかかわる交通事故における死亡・重傷者数ゼロを目指す



▶▶ GRI G4 Indicators
▶▶ G4-PR1

目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーシチズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制

安全への取り組み

安全に対する日産の方針は、リアルワールド(現実の世の中)における安全性を追求することであり、日産は「交通事故のない社会」の実現を目指しています。日本では2014年の交通事故死者数が4,113人となり、14年連続で減少しました。しかし世界保健機関(WHO)は、世界全体で毎年約124万人が交通事故で命を落としており、今後緊急に対策をとらなければ2030年までには死亡原因の5位になると予測しています。

日産は、日産車がかかわる死亡・重傷者数を2015年までに1995年比で半減させることを目指してきましたが、日本、米国、欧州(英国)ではすでに達成しており、現在は、2020年までに日本、米国、欧州(英国)でさらに半減させるという高い目標に向かって活動を続けています。死亡・重傷者数を実質ゼロにすることが、究極の目標です。

交通事故を低減させ、日産の掲げた目標を実現するには、クルマの安全技術を進化させ、その機能を多くのクルマに適用・拡大するのはもちろん、人や交通環境も含む総合的な取り組みが必要です。真に安全なクルマ社会の構築に貢献するため、日産は「クルマ」「人」「社会」という3つの階層に取り組む「トリプルレイヤードアプローチ」を推進しています。

日産の究極の目標:

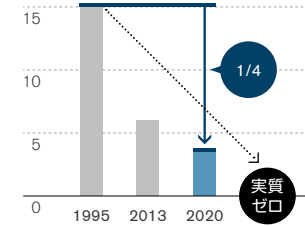
日産車のかかわる死亡・重傷者数を実質ゼロにする

日産の取り組み:

「クルマ」「人」「社会」という3つの階層に取り組む「トリプルレイヤードアプローチ」

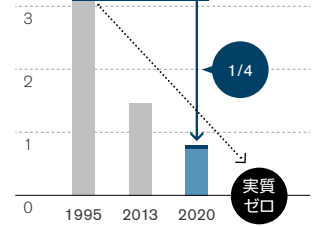


日本 日産車1万台当たりの死亡・重傷者数



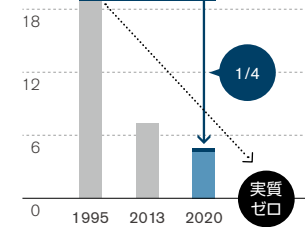
出所:公益財団法人交通事故総合分析センター

米国 日産車1万台当たりの死亡者数



出所: Fatality Analysis Reporting System

欧州(英国) 日産車1万台当たりの死亡・重傷者数



出所: STATS19 data, U.K. Department for Transport

目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーシチズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制

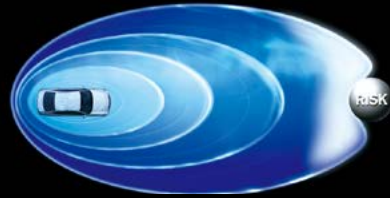
クルマ：安全技術開発への取り組み

「セーフティ・シールド」という独自の考え方のもと、日産ではできるだけドライバーを危険に近づけないようにクルマが支援する技術開発を進めています。また、万が一衝突が避けられないときも、被害を軽減する技術を提供しています。

安全技術コンセプト「セーフティ・シールド」

日産は、クルマが人を守るという独自のコンセプト「セーフティ・シールド」を基本に、安全技術の開発を進めています。これは、クルマが置かれている状態を「危険が顕在化していない」「危険が顕在化している」「衝突するかもしれない」「衝突が避けられない」「衝突」「衝突後」の6段階に分けて捉え、各状況に応じてクルマが人を守るさまざまな技術の開発を進めていくという考え方です。

危険が顕在化していない <ul style="list-style-type: none"> ▪ ディスタンスコントロールアシスト (インテリジェントペダル) ▪ インテリジェントクルーズコントロール (全車速追従・ナビ協調機能付) ▪ アクティブAFS ▪ アラウンドビューモニター 	いつでも安心して運転できるようドライバーをサポートする技術
危険が顕在化している <ul style="list-style-type: none"> ▪ プレディクティブフォワード コリジョンワーニング ▪ レーンデパーチャーワーニング ▪ レーンデパーチャープリベンション ▪ ブラインドスポットワーニング ▪ ブラインドスポットインターベンション ▪ バックアップコリジョンインターベンション 	危険な状態になりそうなときも安全な状態に戻すようドライバーをサポートする技術
衝突するかもしれない <ul style="list-style-type: none"> ▪ エマージェンシーブレーキ ▪ ABS (アンチロックブレーキシステム) ▪ VDC (ビークルダイナミクスコントロール) 	
衝突が避けられない <ul style="list-style-type: none"> ▪ インテリジェントブレーキアシスト ▪ 前席緊急ブレーキ感応型プリクラッシュシートベルト 	
衝突 <ul style="list-style-type: none"> ▪ ゾーンボディ ▪ SRSエアバッグシステム ▪ ポップアップエンジンフード 	万が一衝突が避けられないときに被害を最小限にとどめる技術
衝突後 <ul style="list-style-type: none"> ▪ エアバッグ展開連動ハザードランプ 	



目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーシチズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制

日産の安全技術の拡充と獲得した外部評価(2014年度)

- 2015年1月に、「エマーゼンシーブレーキ」の採用車種を拡大し、2015年度中には、日本で発売している電気自動車、商用車を含むほぼすべてのカテゴリーに搭載を完了すると発表
- 日本では、自動車アセスメント(JNCAP)の予防安全性能評価にて「スカイライン」「エクストレイル」「ノート」が、最高評価となるJNCAP「先進安全車プラス(ASV+)」を獲得
- 米国では、米国新車アセスメントプログラム(US-NCAP)にてインフィニティ「Q50」、日産「アルティマ」が、米国道路安全保険協会(IIHS)にてインフィニティ「Q50」、インフィニティ「Q70」、日産「ローグ」が最高評価を獲得
- 欧州では、欧州新車アセスメントプログラム(ユーロNCAP)にて日産「エクストレイル」「キャシュカイ」「パルサー」が最高評価を獲得

“ぶつからないクルマ”の実現に向けて

どんな運転環境にも必ずリスクがあります。日産は、リスクの芽をクルマがあらかじめ察知し、ドライバーに危険を知らせ、緊急時にはシステムが介入して事故を未然に防ぐ、予防運転安全技術の開発を通じて、より安全な運転をサポートします。日産の「セーフティ・シールド」をクルマの前方だけではなくサイドや後方にも広げた360度「ぶつからないクルマ」が、日産の目指す全方位運転支援システムです。

世界中すべての人に最適なモビリティを提供することを目標に掲げている日産は、安全技術を適用・拡大することも自動車メーカーとしての使命だと考えています。

インフィニティ「Q50」(日本名:「スカイライン」)に搭載された日産初の全方位運転支援システム

前方、側方、後方、全方向での安全性能を高めた運転支援システムが日産初(2013年11月現在 自社調べ)

エマーゼンシーブレーキ

新型ミリ波レーダーで前方車両との衝突の危険を察知すると、ディスプレイ表示やブザーに加え、アクセルペダルの反力と緩やかなブレーキングによる直感的な警報でドライバーに回避操作を促します。それでもドライバーが回避操作を行わない場合には、緊急ブレーキを作動させて衝突を回避、または被害を軽減します。

プレディクティブフォワードコリジョンワーニング

2台前を走る車両との車間距離・相対速度を新型ミリ波レーダーでモニタリング。自車からは見えない前方の状況の変化を検知し、減速が必要と判断した場合には、ディスプレイ表示とブザーによる警報でドライバーに注意を促します。



世界初となるプレディクティブフォワードコリジョンワーニング

ブラインドスポットワーニングとブラインドスポットインターベンション

車両後部の左右に設置したサイドセンサーで、死角になりやすい後側方の隣接レーンに位置する車両を検知。サイドミラー横のインジケーターで知らせます。隣接レーンに車両がいるにもかかわらずドライバーがレーンチェンジを開始すると、接触を回避するよう運転操作を支援します。



ブラインドスポットワーニングとブラインドスポットインターベンション

レーンデパーチャーワーニングとレーンデパーチャープリベンション

ルーフコンソールに配置されたカメラで、自車前方のレーンマーカーとの相対位置を検出し、車両が車線から逸脱する可能性があるシステムが判断した場合には、表示とブザー音で注意を喚起(レーンデパーチャーワーニング)、車両が車線内にとどまることを促す力を発生させ、ドライバーの操作を支援します(レーンデパーチャープリベンション)。

目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーシチズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制

バックアップコリジョンインターベンション

車両後部の左右に設置したサイドセンサーと車両後部のソナーにより、後方を横切る車両を検知。サイドミラー横のインジケーターやバックビューモニターのディスプレイ上の表示と音でドライバーの注意を喚起します。さらにドライバーが後退しようとした場合、アクセルペダルの反力や自動ブレーキなどによる直感的な警報でドライバーに伝え、接近する車両との接触を回避するよう運転操作を支援します。



世界初となるバックアップコリジョンインターベンション

アラウンドビューモニター (MOD [移動物検知] 機能、駐車ガイド機能)

駐車時などで車両を上から見下ろす視点で周囲を表示します。さらに周囲の移動物を検知し、アラウンドビューモニターのディスプレイ上の表示と音でドライバーの注意を喚起します。

予防安全技術から自動運転技術へ

事故を回避するために必要な、認知・判断・操作という基本的な3つのステップすべてを支援する予防安全技術の機能を拡充し、さらなる進化を目指したのが自動運転技術です。日産は、「交通事故ゼロ」の実現には、事故原因の9割以上といわれる人為的ミスをクルマがサポートする自動運転技術が有効であると考えています。

レーザースキャナーとカメラを搭載した自動運転技術の実験車両「Autonomous Drive」は、周囲360度の状況を常に把握。他のクルマに遭遇すると、蓄積された知識データの中から人工知能がその場に応じた適切な行動を選択します。信号機のない交差点への進入や駐車車両の追い越しなど、複雑な運転環境においても正しく状況を認知・判断し、安全な走行を実現しています。

高齢化や都市の過密化など多くの課題に直面する社会において、自動運転技術は事故の大幅な低減に貢献し、多くのドライバーに安心を提供するだけでなく、急速に増加する高齢者にとっては日常的な移動機会の拡大にもつながります。日産は、自動運転技術をモビリティに新たな価値をもたらす画期的な技術だと考え、積極的に開発を推進し、実用化を進めていきます。2016年末までには混雑した高速道路上で安全な自動運転を可能にする技術(トラフィック・ジャム・パイロット)を、2018年には危険回避や車線変更を自動的に行う複数レーンでの自動運転を投入します。2020年までには、ドライバーの操作介入なしに、十字路口や交差点を自動的に横断できる自動運転技術を導入する予定です。



自動運転技術の実験車両「Autonomous Drive」

人：交通安全活動の推進

より良いモビリティ社会を構築するためには、ドライバーや乗員、歩行者、自転車運転者など多くの人々に交通安全への考え方を理解してもらうことが大切です。日産では安全意識の向上に向けた啓発活動や、ドライバーの運転技術向上を支援する活動にも力を注いでいます。

日本における交通安全啓発

1日のうちで交通事故発生件数が最も多くなる時間帯は16～18時の夕暮れ時です。日産は交通安全活動「ハローセーフティキャンペーン」¹⁾の一環として、ヘッドライト早期点灯をドライバーに促す「おもしろライト運動」²⁾に2010年から取り組んでいます。

▶ website | ¹⁾ 「ハローセーフティキャンペーン」に関する詳細はウェブサイトをご覧ください

▶ website | ²⁾ 「おもしろライト運動」に関する詳細はウェブサイトをご覧ください



目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーシズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制

2014年度は、今までの活動を一層強化しました。

- ① ヘッドライト早期点灯研究所(ウェブサイト):クルマ・歩行者両方の視点での「見られやすさ」実験や、ヘッドライト点灯車数調査結果などを掲載し、内容をより充実させました。
- ② 夕方安全創造会議:同様の活動をしている方々とのつながりを目的に、2013年より引き続き開催。企業が行う社会貢献活動の新たな形についてのプレゼンテーションなどを実施しました。



- ③ いい点灯の日(11月10日):2012年から毎年開催。ヘッドライト早期点灯を全国の賛同パートナーとともに呼びかけました。



- ④ ライティングガールプロジェクト:クルマファンに運動を知ってもらうために、全国のクルマイベントに参加し、対話を通じて運動への理解を促しました。

こうした活動を継続してきた結果、おもしろいライト運動は「公共向けの活動・取り組み、社会貢献活動」の枠で2014年度のグッドデザイン賞を受賞しました。日産が推進する運動でありながら、市民やパートナーなど80以上の団体を巻き込んで、交通事故の削減に取り組んでいることが評価されました。



米国での安全啓発活動

北米日産会社(NNA)は、米国で販売されているニッサンおよびインフィニティ・ブランドの車両に適合するチャイルドシートの情報を幼い子を持つ親などに提供する「スナッグ・キッズ」プログラムを2002年より実施しています。同プログラムはチャイルドシートの正しい使用を促す自動車業界初の取り組みで、シートを前向き・後ろ向きに安全に取り付ける方法や、ブースタータイプのシートを取り付ける場合の安全な装着方法のアドバイスを提供します。

▶ スナッグ(snug):サイズがぴったりで居心地がいいこと

年齢や体に合わせて子供に最適なチャイルドシートの選び方を提供する「スナッグ・キッズ・フィットガイド」については2015年モデルにも対応するよう改定を行いました。ニッサンとインフィニ

ティ・ブランドのクルマにはさまざまな種類のチャイルドシートが取り付け可能ですが、それぞれの車種に合うシートのリストを日産のウェブサイトで公開しています。

また日産は2012年より、安全運転の大切さを若い人々に伝えるための啓発プログラム「シンク・ファスト」のスポンサーを務めています。プログラムでは本格的なセットや流行の音楽を使い、司会者の進行によるゲーム形式で行われ、有益かつ若者が興味を持ちそうな知識が取り上げられます。現在はテネシー州、ミシガン州、ミシシッピ州、テキサス州の中学校・高校で行われる125以上のプログラムを支援していますが、今後は日産の拠点がある他州にも拡大する計画です。

中東地域や韓国での安全教育

中東日産会社(NMEF)では、ウェブサイトを通じて子供への安全教育を行っています。2009年10月に開設したサイトでは、小学生向けに交通ルールの基本をアラビア語、英語、フランス語で分かりやすく説明しているほか、パズルやぬり絵などを使って子供たちが楽しみながら学べる仕組みにしています。

韓国日産株式会社(NKL)でも、2009年4月から「日産キッズ・セーフティ・キャンペーン」を実施しています。ウェブサイトや小冊子などNMEF同様のコンテンツを用いて、交通事故防止のための啓発活動を行っています。

中国、インドネシアでの交通事故防止活動

中国では自動車の急速な普及に伴い、交通安全対策が大きな課題となっています。日産(中国)投資有限公司(NCIC)は中国道路交通安全協会とのタイアップにより、人々の安全意識と運転技術の向上を目的とした啓発活動を2005年に開始。お客さま、政府関係者、地元メディアなどの参加を得て、インストラクターの

目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーシチズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制

指導のもと、エコ運転のほか、ブレーキングやコーナリングなどの運転技術を学ぶプログラムを実施し、交通安全に対する理解を深める活動を推進しています。現在、この活動は東風汽车有限公司(DFL)の乗用車部門に引き継がれ、ディーラーを含めた「日産技術安全運転フォーラム」という活動につながっています。

2014年8月には、NCICの協力により「2014中国交通安全フォーラム」が北京で開催されました。日産は「セーフティ・シールド」をはじめ交通安全に関する主要コンセプトを明示し、人・クルマそして交通安全のための道路建設について多くの参加者と議論を深めました。さらに、「中国における交通事故の深層とトリプルレイヤードコンセプト」をテーマに講義を行い、中国における交通事故の現状を踏まえつつ「トリプルレイヤードアプローチ」をベースにした交通安全に関する実践的かつ実行可能な提案を行いました。

またNCICは、10代の青少年における交通安全意識の向上および交通安全と環境保護の理解促進のため、2006年より「日産カップ」を開催しています。8歳から16歳までの子供たちを対象にオンラインクイズを行うもので、2014年は合計2,809人の生徒が参加しました。

インドネシアでは、交通安全の重要性を伝える活動として「日産スマートドライビング」を実施しています。安全運転啓発を目的にライフスタイル誌との共同企画としてスタートし、現在ではインドネシアの大学生にインストラクターが安全運転を直接指導するなど、さらに活動を広げています。

新興国市場で「日産セーフティ・ドライビング・フォーラム」を開催

日産は、新興国市場における安全運転啓発活動の一環として「日産セーフティ・ドライビング・フォーラム」を実施し、一般のお客さまにおける安全運転への意識向上を目指しています。

2014年に活動3年目を迎えたインドでは、中規模都市を含めた8都市まで開催地域を拡大(2012年度は3都市、2013年度は5都市)。シートベルトの装着や、日産提供の安全装備シミュレーターの体験などを通じ、参加者の安全運転への意識向上を促しました。また、SNSなどを通じて同コンテンツを発信したことで、フォーラムに参加していないお客さまからも、従来にない好活動と評価されました。今後も継続的に実施していく予定です。

また2014年度には、ロシアで初めて「日産セーフティ・ドライビング・フォーラム」を実施し、シミュレーターを使った運転試験や安全技術の体験を通じて、安全運転の重要性を啓発しました。

欧州日産自動車会社が従業員向け安全イベントを開催

2014年10月、欧州日産自動車会社(NESAS)のCSRチームは、フランス赤十字社とフランス赤十字社サン=カンタン・アン・ブリーヌ支部の協力を得て、従業員を対象とした安全イベント「ブルーシチズンシップ—従業員の連帯強化と安全知識の習得」を開催しました。救急救命に対する意識の向上を目的としたこのイベントには、およそ20名の従業員が参加。赤十字社のスタッフによる心肺蘇生法やAED(自動体外式除細動器)の実演の後で、ダミーを使った心肺蘇生訓練を行うなどの講習を受けました。

フランスでは年間およそ5万人が心肺停止状態に陥りますが、NESASでは2012年より社内AEDを設置しており、従業員がその使い方を知っていれば、いざというときに人命を救うことができます。CSRチームは今後もNPOなどと協力して、交通安全に関する啓発活動を行っていく計画です。


このイベントでNESASは、総額およそ900ユーロの少額コインを集め、全従業員を代表してフランス赤十字社に寄付しました。


FIAと交通安全のためのパートナーシップを締結

日産は、2014年パリモーターショーにおいて、国際自動車連盟(FIA)と世界規模で交通安全活動を推進していくパートナーシップの締結を発表しました。

このパートナーシップにより、国連が提唱する「交通安全のための行動の10年」を支持するFIAの革新的な啓発活動「FIAアクションフォーロードセーフティ」¹ キャンペーンオフィシャルサポーターとなりました。

同キャンペーンの一環として推奨されている「ゴールデンルールズ」² を世界中で推進することにより、1年間に発生する約124万人の交通事故死亡者や5,000万人の負傷者を減らすことに注力していきます。

 「FIAアクションフォーロードセーフティ」の詳細を掲載しています
▶▶ page_56

 「ゴールデンルールズ」に関する詳細はウェブサイトをご覧ください
▶▶ website



目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーシズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制

社会：社会との連携

日産は、クルマを取り巻く交通環境の情報を利用することで、より安全なクルマ社会を築くことができると考えています。官公庁や大学、他企業と広く連携しながら、高度道路交通システム(Intelligent Transport Systems : ITS)を活用した安全で快適なモビリティ社会の実現を目指していきます。

ITSを活用し、交通事故低減と渋滞緩和へ

日産は、2006年より神奈川県において「人」「道路」「車両」を情報でつなぐITSを活用し、交通事故低減や渋滞緩和への貢献を目指した実証実験「SKYプロジェクト」を推進してきました。見通しの悪い交差点では、他の車両や通行者が見えにくく、事故が発生しやすくなります。同プロジェクトは、クルマ単独では対応が難しい、こうした交通事故の低減に向け、周辺車両の状況や自車を取り巻く交通環境の情報を利用しようというものです。

日産は、SKYプロジェクトの成果を活用した新たな安全運転支援システム(DSSS)を開発。見通しの悪い交差点において、路上のインフラ設備との通信により、音声ガイドとナビ画面表示で、ドライバーに交差点におけるさまざまな危険(出会い頭衝突、一時停止規制見落とし、信号見落とし、赤信号停止車への追突)を伝え、注意を喚起します。

▶ DSSS: Driving Safety Support Systems
警察庁とその所轄法人である一般社団法人UTMS協会が継続的に推進しているプロジェクトで、DSSS用光ビーコンによる路車間通信など、最新のITSテクノロジーを駆使して交通事故の削減を目指すシステム

高速道路上の逆走を報知

近年、高速道路で逆走を原因とする重大事故が多発しており、社会問題となっています。日産は西日本高速道路株式会社(NEXCO西日本)と共同研究を進め、GPSを活用した逆走報知ナビゲーションを開発しました。同システムでは、ナビゲーション内部のプログラムにより、車両情報(GPS位置、地図、車速など)に基づいた逆走判定処理を行います。逆走している場合は、音声とナビゲーション画像によってドライバーに注意を喚起します。2010年10月に発売した「フーガ ハイブリッド」に世界で初めて搭載しています。

目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーシチズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制

ステークホルダーからのメッセージ

「FIAアクションフォーロードセーフティ」キャンペーンで交通安全を推進

国際自動車連盟(FIA)は、国連が提唱する「交通安全のための行動の10年」を支持し、2011年より「FIAアクションフォーロードセーフティ」キャンペーンを行っています。主な活動内容は、国内外での交通安全推進の取り組みを各国の指導者に呼びかけること、そして世界規模で交通安全運動と各種プログラムを実施することです。これらの活動は、世界142ヵ国にある237の加盟自動車団体と、法人・個人のパートナーの支援を得て進められています。

交通事故の問題は非常に深刻で、世界では毎年約124万人が死亡し、5,000万人が重傷を負っています。

FIAは2014年10月、交通安全の推進に向けた取り組みを共同で行うため、日産自動車株式会社とパートナーシップを締結しました。以来、日産はロシアで安全運転啓発イベント「日産セーフティ・ドライビング・フォーラム」を開催するなど、キャンペーンを推進しています。

今年もモータースポーツシーズンが始まりますが、FIAは日産との関係を一層強化し、ともに安全な交通の実現に取り組んでいきたいと考えています。



国際自動車連盟
会長
ジャン・トッド氏